「建築材料」特集

インテリアブラインドと繊維

真 島 昇 一

はじめに

近年の住宅増改築ニーズの定着や、新設住宅着工戸数の急増は、人々の住まいに対する欲求の高度化に起因する部分も大きいと思われる。こうした人々の住まい感の変化は、特に多くのインテリア製品の展開指針に多大な影響を与えはじめている。インテリア小物にはじまり、家具、カーテン、カーペット、壁紙、果ては家庭電化製品までも、インテリア製品としての要素が、しかもかなり高いレベルで要求されているのが現実である。これから述べるインテリアブラインドも、ここ数年の間に、その方向性を大きく転換して来ているインテリア製品のひとつに挙げられるであろう。

1. インテリアブラインドの新しい方向性

従来、日よけまたはプライバシー保護といった機能性のみが求められたブラインドが、インテリア製品のひとつとして脚光を浴びはじめたのはここ数年の事である。インテリアブラインドとして最も代表的な、ベネシャンブラインド(よこ型ブラインド・写真1)を例にとると、羽根幅が大変スリムになると同時に、メーカー各社が競って羽根の多色化を図り、インテリア製品に対する要求の高度化、個性化に増々拍車のかかるユーザーニーズの吸収に努めている。

こうした最近のブラインドの新しい動きは、更にまた新しいユーザーニーズを掘り起こす結果となっている。その新しいニーズとは、製品へのより高い感性の導入である。すなわち色という単一要素ではなく、材質感、手触り感等の複数の要素が複雑に融合した新しいブラインドに対する欲求が発生したのである。このような新しいニーズに答えた形で登場し、現在大きな市場規模に育ちつつある分野の製品が、繊維素材を使用したインテリアブラインド

写真1 「よこ型ブラインド」

羽根幅が15mmで現在最もスリムなタイプのよこ型ブラインド。羽根が1枚1枚よこ方向に整列している構造のブラインドをよこ型ブラインド、またはその発祥の地ベネチア(ベニス)に因んでベネシャンブラインドと呼ぶ。

類である。

2. 繊維素材を使用したブラインドの展開実態

ひと口に繊維素材を使用したインテリアブラインド類と言っても、製品形態によって繊維の使われ方は千差万別である。以下に代表的な製品を紹介する。

①たて型ブラインド(写真2)

幅80mm~100mm程度の羽根を製品上部のハンガーレールに掛け、この羽根を回転させる事によって採遮光を行うタイプのブラインドをたて型ブラインドと呼び、羽根の素材としては、細幅の織物または広幅織物を所定の幅にスリットしたものを多く使う。

②ロールスクリーン(写真3)

従来は車輛の窓などに多く使用されていた、生地を製品上部のパイプを利用して巻き取ったり、引き出したりする事で採光量を調整するタイプのブラインドで、今現

Interior Blind and Fabric

筆者紹介 SHOICHI MAJIMA, Tachikawa Corporation, 立川ブラインド(株)生活インテリア室主任

筆者は製品設計、営業企画、新商品企画等に從事されてきており、趣味はスポーツ全般。

本稿では、建築材料としてのインテリアブラインドについて、その新しい展開と、それに使用される繊維材料の要求特性を述べていただいた。

写真2 「たて型ブラインド」

羽根をたて方向に整列したブラインド。メンテナンスの容易さやかなり大きな開口部への対応が可能な事もあり、オフィスでの使用が一般的。

写真3 「ロールスクリーン」

現在急成長中のインテリアブラインドのひとつ。生地の色柄種類も豊富でしかも納まりがスッキリしておりインテリア性が高い。

在は、この基本構造をベースに、使用する生地に高級感のある織物やプリント生地を使用する事で、近年店舗ユースを軸に、その市場性を急速に拡大して来ている製品ラインである。

③ローマンシェード

カーテン感覚にかなり近く、一般的にたくしあげカーテンとも呼ばれ、製品上部に生地のたくしあげ機構を設け、開放時は生地を上部にたたみあげてしまうタイプのブラインドで、大変高級感がある。

④プリーツシェード

その名が示す通り生地をプリーツ加工し、ベネジャン

ブラインド同様上部にたたみ上げる方式のブラインドである。生地を下ろした状態では、プリーツ加工された生地の折りが美しい横のラインをつくる。

以上が、現在市場で多く見かける繊維素材をベースとしたブラインドである。そしてこれらの製品群は、ウィンドウトリートメント(窓まわり装飾)に対する人々のニーズの多様化に呼応する形で、今、大きく成長しようとしている。

3. ブラインド用素材としての 繊維材料の要求特性

ブラインド用素材として繊維材料を使用する場合、そのほとんどが織物または編み物に加工されて利用されるが、利用される製品形態によって、一般的なカーテンとはかなり異なった、特殊な加工および品質が要求されるケースが多く存在する。

①たて型ブラインド用の羽根の場合

先にも述べた通り、通常羽根幅が80mm～100mm程度であるのに比して、長さ(製品高さ寸法)が5mを越えて使用される事も珍しくなく、その様な場合に羽根1枚1枚がツイスト現象(ねじれ)を起こし、機能面の阻害要因となりかねない。従って、このツイスト現象を防止する為に、織物設計の段階から細心の注意を払う必要があるのである。また、所定の幅による細幅織物の場合は問題はないが、広幅の織物からスリットして所定の幅に仕上げる場合は、スリット面の糸のはつれが発生しやすく、長期間の使用では羽根の端部がぼろぼろになってしまうおそれがあり、織物の仕上げ段階ではつれ防止の為の特殊樹脂加工を施さなければならない。

②ロールスクリーン用生地の場合

ロールスクリーンに使用される生地は、カーテンの様にひだを作らず、平面状態で使用する為、特に生地のしわ、ゆがみ及びプリントの柄曲がり等が非常に目立ってしまう。これらの問題点解消には、生機生産→プリント→樹脂加工→製品組み立ての各工程を包含する。一貫した品質管理システムの整備と織物設計段階における糸材質、織り組織の選択に十二分な配慮が必要となるのである。更に使用される生地幅がロールスクリーンでは、2m以上必要となる為(カーテンや衣料では通常1m～1.5m)、先に述べた問題点に対する品質管理を一層困難なものとしている(写真4)。

また、最近のロールスクリーン市場は、一般住宅から店舗、オフィスまでその用途の幅が広がって来ている。その結果として現在使用される生地には、消防庁認定の防火性能が必須条件となっている。

写真4 「大柄プリント生地を使った
ロールスクリーン」

2m×2m 程度の大きな面積にプリントをのせたパターンも多く、部屋をかなり個性的に演出する事ができる。ただし生産技術的には、大きな面積のプリント技術に絶対的な品質安定性が現在無く、材料歩留まりが悪い。

③ローマンシェード用生地の場合

ローマンシェードに使用される生地そのものは、カーテンと同様だが、ローマンシェードには、プレーン（フラットタイプ）、バルーン（スタイルカーテン風）、オーストリアン（チリチリカーテン）の各タイプがあり、各々の縫製方法が全く異なるばかりでなくその縫製技術も一

般のカーテンに比して、かなり複雑なものとなっている。

④プリーツシェード用生地の場合

プリーツシェードと言う製品自体の市場規模は、国内ではまだ小さいものだが、外国特にアメリカ、ヨーロッパ各国ではかなりの規模がある。プリーツシェード用生地の生命線はなんと言ってもプリーツ加工の精度と品質にかかっている。この点については、やはり欧米の技術力に一日の長がある様で、国産物も徐々に出回りはじめてはいるが、品質的にはもう一歩という感否めず 今後の国内における生産技術の開発が求められているのが現実である。

4. 今後の展開について

以上述べた通り、ウインドウトリートメント製品による新しい繊維素材の活用途は、例示した製品を中心に、今後とも一層の拡大傾向にあると予想される。しかしながら、これから更に進行するであろう消費者のインテリア製品に対する意識高揚、本物指向を継続的に充足させる為には、先に述べたように、インテリアブラインド用素材として繊維材料を活用する場合の要求特性を熟知した上で、一刻も早く安定した品質確保に努める事が不可欠であると考えている。

(昭和63年1月9日受理)

全繊維・全加工段階を収録した

1988年版「繊維ハンドブック」

(「化繊ハンドブック」改題)

< B6判 430頁 5,000円(送料とも) >

最新の内外繊維データバンクとして定評のある「化繊ハンドブック」の「1988年版」が『繊維ハンドブック』（監修/日本化学繊維協会、発行/繊維総合研究所）と改題して、このほど発刊された。

1959年の「化繊ハンドブック」の初版から数えると、この「88年版」は24回目の刊行に当たり、この間、毎回、当「ハンドブック」は細部にをたる見直しと増補が行われてきたが、今回の大幅改訂により、文字どおり、繊維原料から素材、テキスタイル、アパレル、流通、消費に至るまでの全繊維、全加工段階の最新データ・資料が収録され、“繊維のことなら何でも分る”ハンドブックとなった。

例えば、化合繊維関係の充実は当然として、従来に増して、綿・毛・麻・獣毛と天然繊維関係の内外の諸データが整備・収録されており、一段と内容が充実している。

構成は「国内統計編」「国際統計編」「資料編」の3部から成り、特に今回の改訂に伴い、全体を通じて既刊内容との既刊内容との継続性に細かい配慮が届いている。

「化繊ハンドブック」からオール『繊維ハンドブック』に衣替えした「1988年版」は、繊維業界に携わっている人にはもちろん、繊維を研究、あるいは繊維に関心を持っている人にとって活用範囲の広い1冊である。

お問合せ・お申込みは繊維総合研究所まで

〒103 東京都中央区日本橋室町3-1-20(三井別館) TEL 03-241-1573